

精神医学の知と技

*Knowledge and Arts of Psychiatry*

# 精神科医 遍歴五十年

臨床精神医学の経験に学ぶ

風祭

元

● Hajime Kazamatsuri

中山書店

## 序章 私の生い立ち 3

一 私の少年時代 3

二 茨城県立水戸中学―水戸一高―東京都立国立高―東京大学入学まで 5

## 第一章 東京大学で医学を学ぶ 7

一 東大医学部医学科の学生時代 7

二 東大で精神医学を学ぶ―講義と教科書 9

三 内村祐之教授の臨床講義 11

四 内村教授の最終講義とご退官 12

五 精神医学の道を選ぶ 15

六 秋元波留夫教授の精神医学 17

七 私が東京大学で学んだ精神医学 19

## 第二章 精神科初期研修と神経生理学研究 23

- 一. 医師国家試験 23
- 二. 精神医学教室への入局 24
- 三. 東大での初期の精神科研修 25
- 四. 精神科入院患者診療の研修と実際 27
- 五. 昭和三十〜四十年（一九五五〜一九六五年）頃の東大病院精神科病室 36
- 六. 神経生理学の動物実験 38
- 七. 東大分院神経科での一年 40
- 八. てんかん終夜脳波の研究 41
- 九. その他の研究など 45
- 十. 東大での臨床研修・研究で得た私の精神医学 46

## 第三章 東大学生の診療と関東中央病院神経科 49

- 一. 東京大学学生診療所 49

- 二 大学院卒業と関東中央病院神経科への赴任 51
- 三 関東中央病院神経科 52
- 四 開放病棟での生活療法 54
- 五 関東中央病院での経験から得たもの 59
- 六 東大への帰局と臺弘教授就任 59
- 七 東大保健管理センター精神科助手となる 64
- 八 保健管理センターでの診療と東大新入生の面接 65

## 第四章

### 東大医学部ストライキ（いわゆる東大紛争）と 精神科の内紛 69

- 一 昭和四十年代までのわが国の医学教育の歴史と状況 69
- 二 大学医学部における医局制度——二重構造 71
- 三 東大医学部の学生ストライキの経緯 74
- 四 昭和四十二年以後の医学部学生の状況 77
- 五 いわゆる「上田内科事件」 78

- 六. 医学部の誤認処分問題とストライキの全学への波及 80
- 七. 全国の医学生への動向と東大構内での混乱 82
- 八. 大河内一男東大総長の辞任 84
- 九. 東大全学のストライキ 86
- 十. 東大全学ストライキ再考 89
- 十一. 東大全学ストライキの終結 92
- 十二. 精神科医局解散決議と臺教授不信任 93
- 十三. その後の東大精神科と精神科医師連合 95
- 十四. 医学部学生大会の特別決議 99

## 第五章 アメリカでの精神科薬物療法学の研究 105

- 一. 外国での精神医学の研究を考える 105
- 二. 東京大学医学部卒業生の卒業研修をめぐる混乱 106
- 三. アメリカでの研究生活の始まり 110
- 四. 遅発性ジスキネジアの研究 117

## 第六章 帝京大学医学部精神科学教室の創設 129

- 一. 日本の医学教育の歴史 129
- 二. 帝京学園と帝京大学医学部の歴史 132
- 三. 私と帝京大学とのかかわり 133
- 四. 帝京大学医学部精神科の創立 135
- 五. 精神医学教室の基本方針 138
- 六. 帝京大学精神科創立初期の対外的活動 140
- 七. 帝京大学における学生教育 141
- 八. 大学医学部の新設の経験から学ぶ 145
- 九. 帝京大学での新しい試み 149
- 五. アメリカの臨床精神薬理学の日本への紹介 124
- 六. 日本への帰国 125
- 七. アメリカでの研究で得たもの 126

## 第七章 帰国後の東大医学部精神医学教室 157

- 一. 東大精神科の分裂状態 157
- 二. 東大精神科病棟不法占拠の経過 158
- 三. 東大医学部精神医学教室出身者の動向 161
- 四. 東大精神科の分裂が続いた理由と経緯 163
- 五. 東大精神科の診療統合 168
- 六. 東大精神科の長期分裂状態の再考 169
- 七. 東大精神科の分裂がもたらしたもの 170
- 八. あらためて東大紛争と精神科をふり返る 173

## 第八章 帝京大学精神科における精神科薬物療法の研究 185

- 一. アメリカ精神科薬物療法の紹介と導入 185
- 二. 向精神薬の副作用に関する研究 187

- 三. 抗精神病薬と抗パーキンソン薬の併用についての研究 189
- 四. 各種向精神薬の多施設共同研究―特にアモキサピンの効果に関する多施設共同研究 191
- 五. 薬物血中濃度の研究 194
- 六. 抗精神病薬の副作用についての日米共同研究 195
- 七. わが国の精神科薬物療法に対する批判 196
- 八. 一般啓発書の出版―とくに『向精神薬療法ハンドブック』 198
- 九. 精神科薬物療法学に私は何を寄与したか 201

## 第九章 帝京大学での社会的活動と学会 203

- 一. 帝京大学医学部の開学と地域医療 203
- 二. 東京都心身障害者福祉センター 205
- 三. 地域の養護学校校医 207
- 四. 板橋精神衛生協議会と城北精神医療研究会 209
- 五. 厚生省の各種委員会 210



- 六. 日本精神神経学会の評議員・理事 213
- 七. 精神科関連の国内の学会の創立と関与 219
- 八. 学術雑誌の創刊と編集 220

## 第十章 司法精神鑑定の経験 223

- 一. 精神医学と司法精神鑑定 223
- 二. 東京大学精神医学教室と司法精神鑑定 223
- 三. 帝京大学医学部での司法精神鑑定 225
- 四. 印象に残る精神鑑定の例 227
- 五. 私の行った司法精神鑑定の総括 237
- 六. 精神鑑定について私が考えたこと 238

## 第十一章 国際会議への参加と思い出

247

- 一. 最初の発表―世界精神医学会議（メキシコ） 247
- 二. 第1回世界生物学的精神医学会議 249
- 三. その後の国際会議出席の経験 249
- 四. 環太平洋精神科医学会議（PRCP） 252
- 五. 国際神経精神薬理学会議（CINP） 256
- 六. 国際会議を振り返る 258

## 第十二章 東京都立松沢病院院長

261

- 一. 帝京大学教授から東京都立松沢病院院長に 261
- 二. 松沢病院の歴史 263
- 三. 松沢病院に赴任して 266
- 四. 戦後の松沢病院の役割の変化 268
- 五. 東京都の精神科医療施設と公立病院 269

- 六. 私は松沢病院で何をしたか 271
- 七. 東京都立病院の再編成計画 273
- 八. 私が松沢病院院長として感じたこと 275
- 九. 松沢病院院長を退職する 282

### 第十三章 医師引退・発病・著述の日々 285

- 一. 松沢病院院長の退職と自由な日々―短い第一の老後 285
- 二. 脳梗塞で医師を辞める 287
- 三. 著述の日々―第二の老後 289
- 四. 気管支喘息重積症による入院―第三の老後 292
- 五. 友人たちとの老後の交友 294

## 第十四章 人生と精神医学を振り返る

297

- 一. 医学の対象疾患の変遷 297
- 二. 精神科医療の変化 299
- 三. 精神科疾患の変容 301
- 四. 統合失調症 (Schizophrenia) 306
- 五. エピローグ 311

あとがき  
人名索引

# 精神科医遍歴五十年

臨床精神医学の経験に学ぶ



## 序章 私の生い立ち

### 一・私の少年時代

私は一九五二年（昭和二十七年）に東京大学教養学部理科Ⅱ類に入学し、当時の制度に従って二年の教養課程を経てもう一度あらためて医学部の試験を受けて、東京大学医学部医学科に一九五四年（昭和二十九年）に進学した。当時の東大の理科Ⅱ類は、東大の理系学部（農学部、医学部、理学部生物学系学科）に進学する学生のための教養課程で、私は東大教養学部に入學した時は、必ずしも医学部に進学するつもりではなかった。

私は、父風祭香（一九〇四年、明治三十七年生まれ）、母サカエ（一九〇九年、明治四十二年生まれ）の長男として一九三四年（昭和九年）三月に、父が勤務していた東京帝国大学の近くの東京府本郷区（のちの文京区）向ヶ丘弥生町で生まれた。その後、父が日本赤十字病院茨城支部病院（現水戸赤十字病院）に小児科医長としてつとめたので、私は子供の頃は茨城県水戸市の郊外

で育った。水戸の自宅には広い裏庭があり、父はそこで鶏や兔を飼っており、家は水田や野原に囲まれていた。私は、小学校入学以前は幼稚園にも行かずに、鶏や兔に毎日餌をやり、弟と一緒に自宅の前の小川や田んぼでメダカをすくったり蛙を追いかけてたりして自然の中で育ったので、生き物が好きだった。

小学校二年生の時に太平洋戦争が始まり、入学した茨城師範学校附属小学校も国民学校と改名された。三月の早生まれで体力がなかった小学校時代は、あまり楽しい思い出がないが、小学校六年生の一九四五年（昭和二十年）八月二日早曉に、水戸市の自宅は米軍の焼夷弾攻撃で全焼し、間もなく八月十五日に日本は敗戦を迎えた。

私はその時中学（旧制）受験の時期であったが、敗戦後の窮乏で、生きて行くのが精一杯という時代だった。進学予定の茨城県立水戸中学も校舎が全焼して筆記試験どころではなく、内申書と口頭試験の成績で選考が行われた。茨城師範附属国民学校を優等で卒業していたので、いわゆる受験勉強は何もせずに、水戸中学（旧制）に合格して入学した。

水戸中学では、課外活動で「生物同好会」というのに入った。蝶やカミキリムシの標本を作ったり、山野を歩いて胴乱に植物を採って押し葉の標本を作ったりすることに夢中になった。やせっぽちで体力がなかったので、運動系の課外活動には入れなかった。読書は好きだったが、文学や芸術に特別な興味や関心をもって打ち込むこともなかった。とにかく終戦後の窮乏で、何にもない時代でもあった。



私の小学校時代は太平洋戦争の時期と一致し、戦時色一色の毎日であったが、勤労働員はな  
く、地方都市に住んでいたので学童疎開の経験もなかった。同年代の人たちの中には外地から苦  
労して引き揚げてきたり、家族が戦死したりして苦労した人も少なくないが、私は戦中戦後に両  
親や兄弟が健康で、終戦を内地で迎えられたのは幸せなことであった。

私の数年年長の先輩たちは、終戦によって、軍国主義から民主主義へという社会の価値観の極  
端な変化に大きいショックを受けた人もいたが、われわれの世代は終戦時にはまだ子供で、周囲  
の変化に対して柔軟に適応し、生活難の中でいつの間にか平和を愛する民主主義者になった。

## 二・茨城県立水戸中学―水戸一高―東京都立国立高―東京大学入学まで

終戦後の一連の学制改革で、旧制水戸中学は水戸第一高校に昇格し、そのまま入学試験もな  
く、中学から高校に進学できた。中学時代は本校と離れた旧東部三七部隊の兵舎で過ごし、ずつ  
と三年間最下級生で、下の学年がないので落第することもなかった。

水戸一高でも相変わらず生物同好会中心の生活で、水戸一高構内の池に食虫植物のタヌキモを  
見つけて学校の雑誌に発表したりしていた。不得意な音楽・図工などの授業はほとんどなく、体  
育も、水戸一高は戦災で体育館も焼失し、鉄棒も跳び箱もなかったので、学校の成績はよかつ  
た。友人も多かったが、男女別学で、女性との交際などは考えたこともなかった。

昭和二十四年に、父が東京に新設された武蔵野赤十字病院に赴任することになり、高校二年の一学期に、東京の国分寺に転居し、東京都立国立高校に転校した。そこでも生物部に入って、「博物少年」の生活を送っていた。高校二年の夏休みに八丈島に二週間滞在して植物採集をしたことは今でも楽しい思い出である。昭和二十七年に東大教養学部理科Ⅱ類に入学したが、その時は漠然と理学部で自然を研究したいと思っていた。

教養学部の二年を修了して専門課程への進学を決定する時に、なぜ医学部を選んだかと聞かれると、今ではうまく説明出来ない。一つは、大学での生物学の研究は、博物少年が中学高校時代に熱中していた博物学とはまったく違うことが分かったからであろうか。当時、オパーリンの『生命の起源』や、ソ連のルイセンコの遺伝学説などに関する本などを一生懸命読んだが、高校生の考えていた「博物学」とは大分かけ離れた内容で、生物学に対する学問的関心は徐々に薄れていった。

その頃、父は遅まきながら、自宅で小さい小児科・内科医院を開業したので、医師の父を持つ私が、何となく医学部に進んだのはごく自然であった。私の青少年時代に、周囲には文科系の公務員、会社員、製造業、商業関係者は一人もいなかった。私が医学部に進んだのは、このような周囲の環境の影響も大きかったように思う。

中学―高校時代は、物質的には窮乏の時代であったが、私の人生の中でもっとも楽しい時代であったと回想することが出来る。

# 第一章 東京大学で医学を学ぶ

## 一・東大医学部医学科の学生時代

東大教養学部理科Ⅱ類を終了して、もう一度医学部の入学試験を受けて医学部に入学した。教養学部で初めて高校の授業とは違う大学の人文、社会、自然科学の学問に触れ、ドイツ語、フランス語なども勉強して、広く学問的教養の素地を培うことができた。

医学部に進学してからの毎日の医学の勉強は、解剖学、生理学などに始まる基礎医学、内科学、外科学、小児科学など多くの臨床医学は、どの科目も興味深く、新しい知識を次から次へと吸収して知的好奇心を満足させることができ、勉強するのが面白く楽しかった。

医学部在学中は、卒業後の進路のことはあまり考えなかったが、何となく父のような内科系の医師になろうと考えていた。父は私が医学部に入った頃に三鷹市で小児科・内科の小医院を開業していたが、勤務医生活が長かったせいか、開業医生活に必然的に伴う保険診療の煩瑣な請求事

務などを嫌がり、私に医院の後継を求めることは全くなかった。

私がなぜ精神科医になったかは後になってよく聞かれたことだったが、今では自分でよく説明出来ない。臨床医学はどの科も興味深く勉強したが、学生時代の夏期実習の経験などで外科系の手術は手先が不器用で、手術の技能に習熟する自信がなく、眼底や鼓膜もよく見えないので、外科系の医師になることはある時期からあきらめた。もともと小説など読むのが好きで、人間のこころの動きの描写などには興味があったので、医学の勉強の中で脳の機能と精神現象との関係に興味があり、脳神経系の医学の研究に関心を持ったことは、精神科を選んだひとつの理由である。医学部での小川鼎三先生の脳神経系の解剖学の講義、冲中重雄先生の神経系の内科の臨床講義、内村祐之先生の精神医学の講義など、神経系の医学の講義をしてくださった先生がそれぞれ円熟したすぐれた医学者であったことも、神経系の医学に興味を持ったひとつの大きな理由であった。

そのうちでも、私は精神科の内村祐之先生の、円熟して内容の濃い精神医学の臨床講義にとりわけ大きな感銘を受けた。今考えると、これが私が精神医学を専攻しようとしたひとつの要因であって、その時に教えられた精神医学が、その後の私の生涯の精神医学の臨床と研究の基礎となった。

## 二・東大で精神医学を学ぶ―講義と教科書

東大医学部では、医学部専門課程の一年（M1）と二年（M2）は基礎医学の講義と実習が大半を占めるが、M2の一学期（四月）から内科学と外科学の講義が始まり、三学期（一月）からその他の臨床科目の二年間の講義と実習が始まる。精神医学は、M3の十二月まで週一回、笠松章助教授と島藺安雄講師の精神科学各論の講義があり、M3の一月から一年間、内村祐之教授の臨床講義があった。

医学部の他の科目では、最初の講義では教科書や参考書が紹介されるが、精神科で笠松・島藺先生は、特に特定の教科書や参考書を指定されることはなかった。当時（一九五五年、昭和三十年）書店に並んでいた精神医学の教科書には次のようなものがあった。

- ・ 三宅鑑一著、島藺安雄改訂『精神病学提要』、南江堂
- ・ 吉益脩夫『精神医学』（ブルーライン叢書）、医学書院
- ・ 西丸四方『精神医学入門』、南山堂（第五版）

当時、他の科目では、ポールドウインの動的生化学、フルトンの生理学、ハリソンやセシルの内科学などの教科書の海賊版を購入できたが、精神科の外国語の原書は古書でも入手するのが難

しく、私の語学力では読めそうもなかった。

M3の時の精神科講義は、島蘭安雄講師だったので、島蘭先生が三宅鑛一先生の教科書を改訂した『精神病学提要』（増補改訂六版・一九五六年発行）をまず買って参考書としたが、これは私が生まれる前の昭和七年（一九三二年）に初版が発行されて、戦前戦後を通じて全国の医大・医専で教科書として使われていたものである。疾患分類はクレペリンに依ったもので、患者さんの作品の挿絵などが多く興味を引くものであったが、全文が文語体で用語も難しく（叡智障害など）いかにも古めかしく最新の講義の内容にはふさわしくなかった。しかし講義の中に頻繁に現れるドイツ語の術語が使われており、私は学生時代には講義を中心に三宅先生の教科書を参考として精神医学の知識を得たといつてよい。

この頃丁度、京大教授の村上仁先生の『異常心理学』が岩波全書の一冊として発行され、分かりやすい本で精神病理学の勉強はこれで補った。西丸四方先生の『入門』は今読むと簡潔ないい教科書であるが、当時はやさし過ぎるようで物足りなく感じ、吉益脩夫先生のブルーラインは文章が難解でいくら読んでもよく理解できないところがあった。内村祐之先生は一九四八年（昭和二十三年）に、南山堂から『精神医学教科書』（上巻）を出版しておられたが、下巻はなく、当時の新刊書店では絶版で入手できず、学生の間ではほとんど話題にならなかった。

私が卒業した一九五八年に、新福尚武先生の『新精神医学』、諏訪望先生の『最新精神医学』、笠松章先生の『臨床精神医学』などの新しい立派な教科書が続けて発行され、私はインターン時

代にはこれらの教科書で精神医学を勉強し直した。初めて私が精神医学を勉強した時の精神疾患の体系が、クレペリンの記述的精神医学であったことは、私の一生の精神科医療の方向を決めたといつてよい。

### 三・内村祐之教授の臨床講義

昭和三十二年（一九五七年）の内村教授の精神医学の臨床講義は全部で二三回あったが、そのうちの一回は、教授が昭和三十年に日本医学会総会で行われた特別講演「晩近におけるてんかん研究の進歩」の再演であった。

内村教授の臨床講義のタイトルは次のようなものであった。なお、病名は当時の呼称である。

1. 老年痴呆
2. ヒステリー
3. バセドウ精神病、慢性アルコール中毒
4. 皮質下性感覚失語症
5. 健忘失語症、猪瀬型肝腦疾患
6. ハンチントン舞蹈病
7. 頭部外傷性精神障害
8. 精神分裂病
9. 精神分裂病
10. 心因性反応
11. 一酸化炭素中毒後遺症
12. 進行麻痺
13. てんかん
14. 特別講演「晩近におけるてんかん研究の進歩」
15. ワクチン接種後脱髓腦脊髄炎
16. 抑うつ状態
17. 躁状態、躁うつ病
18. ループス精神病の疑い、アルコール中毒
19. 神経性食欲不振症
20. 精神病質
21. てんかん病質者の犯罪
22. パーキンソン症候群、間脳障害による精神症状群
23. ナルコレプシー、ヒステリー

これを見ると、ほぼ半数が脳器質性疾患であるが、これは、精神疾患は本質的に脳の疾患である、あるいは脳の障害が精神疾患の基盤にあるという先生のお考えを示すものであろう。当時は、東大病院には神経内科という診療科はなく（脳研究所の一部門として教室が出来、病院の診療科として発足したのは昭和三十九年）、少しでも精神神経症状のある患者さんは脳の病気で、精神科の守備範囲と考えられていた。てんかんは勿論のこと、巢症状を示す脳血管障害、脳性小児麻痺などである。

#### 四・内村教授の最終講義とご退官

内村祐之教授は、私の卒業する昭和三十三年三月に、定年で退職されることになり、三月十三日に最終講義が南講堂で行われた。この時期は、われわれは学部の六年生の卒業試験の最中で、講義は一年下の学年（昭和三十四年卒）に行われたが、私はその講義を精神科の医局員や教室の先輩と一緒に聞くことができた。

最終講義は精神科医としての先生の一生を回顧した内容で、感銘深いものであった。当日はノートは持って行かなかったため、今は小さい紙のメモしか残っていないが、およそ次のような内容のものであった。

1. 内因性精神病の出現率の調査
2. 双生児研究
3. 北支におけるモルヒネ中毒の研究



4. 原子爆弾被災者脳の神経病理学研究／5. 重大犯罪者の司法精神鑑定の経験（医学部教授  
大量窃盗事件、聾啞者の殺人事件、東京裁判大川周明氏、小平義雄事件犯人、俳優仁左衛門殺人事  
件、帝銀事件犯人など）／6. 脱髄性脳炎の病理と多発性硬化症の病因との関連／7. 東大精  
神医学教室の研究業績の紹介（定位脳手術装置の開発、精神神経疾患の脳波研究など）

内村教授は、在職中の最大の思い出として、近代精神医学の創始者エミール・クレペリンの生誕百周年記念祭の開催を最初に提唱され、そこで教授が、イムの研究、脱髄脳炎に関する病理学的研究などの日本における研究業績を紹介したことであったと述べられた。南講堂には、双生児研究の被験者で、成長した一卵性双生児の姉妹が招待されて出席していた。

最後に先生は、医学者と臨床医としての自分を振り返られて、「自分はいつも誠実で、良心的であろうと心がけてきた、医師としてもっとも大切なものは患者にいつも愛情をもって接することであるが、愛情という若い人達にすぐに恋愛と結びつけて考えられることもあるので、私は同情という言葉を用いている。患者に対する同情こそが医師として重要であり、知力があれば学者にはなれるが、良い精神科医になるためには、暖かい心が必要である」と述べられた。

内村先生は、後に出版された『わが歩みし精神医学の道』の中で、自分の教授時代に、精神医学の中の一つの専門領域に偏ることなく、さまざまな研究を志してそれなりの成果をあげたことを回顧しておられるが、そのことを実感させられた印象深い最終講義であった。

内村祐之先生は、退官後、東大在任中に設立された神経研究所の所長に就任され、翌年四月に開催された第15回日本医学会総会の会頭をされた後に、日本精神神経学会の理事長を辞任された。昭和三十六年十月から昭和三十七年四月まで半年間、国立精神衛生研究所所長、昭和三十七年五月から昭和四十年四月までプロ野球コミッショナーを務められた。その後は神経研究所所長に専任されて、附属晴和病院で診療と医局員の指導をされながら、雑誌「精神医学」に「わが歩みし精神医学の道」、「精神医学の基本問題」を連載された。また、昭和四十年には日本学士院会員となり、昭和四十六年には、昭和天皇の講書始の儀で「異常な精神現象の進化論的解釈」を御進講された。いずれもわが国の精神科医としては初めてのことである。

『精神医学』誌の連載は『わが歩みし精神医学の道』（みすず書房、一九六八）、『精神医学の基本問題』（医学書院、一九七二）としてそれぞれ発行され、私は『わが歩みし精神医学の道』は手垢のつくほど繰り返し返して読んだ。内村先生は、昭和五十五年（一九八〇年）九月に八十二歳十か月でその生涯を閉じられた。

私は内村先生の退官と同じ年に卒業したので、先生から精神医学の臨床を直接にご指導頂く機会には恵まれなかったが、先生は私がつとも尊敬し、その生涯のあり方に少しでも近付きたいと思つて来た精神医学者である。

## 風祭 元 (かざまつり はじめ)

医学博士、帝京大学名誉教授



- 1934年 東京に生まれる  
茨城県水戸で少年期を過ごす  
東京都立国立高校卒業
- 1958年 東京大学医学部卒業、  
翌年医師免許取得、精神科専攻
- 1970-1972年 米国タフツ医科大学精神科・  
ボストン州立病院で研究
- 1972年 帝京大学医学部精神医学教授
- 1994年 東京都立松沢病院長 (2001年退職)

### せいしん いがく ち わざ 精神医学の知と技

### せいしん か い へん れき ごじゅうねん 精神科医遍歴五十年

### りんしやうせいしん いがく けいけん まな 臨床精神医学の経験に学ぶ

2013年7月31日 初版第1刷発行  
[検印省略]

著者……………かざまつり はじめ  
風祭 元

発行者……………平田 直

発行所……………株式会社 中山書店  
〒113-8666 東京都文京区白山1-25-14  
TEL 03-3813-1100 (代表)  
振替 00130-5-196565  
<http://www.nakayamashoten.co.jp/>

装丁……………花本浩一 (麒麟三隻館)

印刷・製本…図書印刷株式会社

©Hajime Kazamatsuri 2013

Published by Nakayama Shoten Co.,Ltd.

ISBN978-4-521-73769-0

Printed in Japan

落丁・乱丁の場合はお取り替え致します

- 本書の複製権・上映権・譲渡権・公衆送信権 (送信可能化権を含む) は株式会社中山書店が保有します。
- JCOPY (財) 出版者著作権管理機構 委託出版物)  
本書の無断複写は著作権法上での例外を除き禁じられています。複写される場合は、そのつど事前に、(財) 出版者著作権管理機構 (電話03-3513-6969, FAX 03-3513-6979, e-mail: info@jcopy.or.jp) の許諾を得てください。

本書をスキャン・デジタルデータ化するなどの複製を無許諾で行う行為は、著作権法上での限られた例外 (「私的使用のための複製」など) を除き著作権法違反となります。なお、大学・病院・企業などにおいて、内部的に業務上使用する目的で上記の行為を行うことは、私的使用には該当せず違法です。また私的使用のためであっても、代行業者等の第三者に依頼して使用する本人以外の者が上記の行為を行うことは違法です。